

2023年5月14日（日）／説教者：神谷武宏

説教：「とりなし」

聖書：創世記18：16～33

物語は、神が悪に満ちたソドムとゴモラの町を滅ぼすという中で、アブラハムの「とりなし」があるところだが、しかし、もう少しきちんと見る必要がある。聖書はこう記している。主は言われた。「ソドムとゴモラの罪は非常に重い、と訴える叫びが実に大きい。わたしは降って行き、彼らの行跡が、果たして、わたしに届いた叫びのとおりかどうか見て確かめよう。」神は、決して高い所から見下ろすお方ではないということが記されている。《訴える叫び（を聞いて）わたしは降って行く》と神は言うのである。この「降って行く」神は、あのクリスマス物語もそうであるように、この世に降り、飼い葉おけの中に身を置くお方である。

アブラハムは、ソドムの町が滅ぼされないように神に祈る。「正しい者が50人いるならばお赦しにならないのですか、・・・45人いるのならば、40人、30人、20人、10人・・・」と祈りは続く。私たちはこのアブラハムの執り成しの祈りの物語を往々にしてアブラハムの頑張りに目が行くものではないか？しかし、忘れてならないことは、神がアブラハムの祈りの前に留まり、訴えに耳を傾けておられたとことを見逃してはいけない。そして、アブラハムが50人…10人と言う度に神は「その者たちのために、町全部を赦そう・・・わたしは滅ぼさない・・・わたしはそれをしない」とお答えになる。このところからも伺えるように、神は町を滅ぼす事が目的ではない。神は、人の誤りや欠点、悪の部分を探すという事よりも、正しさや真実を探し、常に十人の正しい人を求めたもうお方である。

ただいわゆる「正しい人」とは何も道徳的な“正しさ”ではない。道徳は、国や文化、時代の違いでその正しさは変わっていく。聖書の言う「正しい人」とはどのような人か？あのイエスの山上の説教の「十の幸い」を見る時、そのかたちが見えてくる（マタイ福音書5：1～11）。

聖書を見る時、「とりなし」をもっとも行った方は誰か？それはあの十字架にはりつけにされたキリストではなかったか。何のためにか？それは、私の弱さ、私の罪のためであり、私と共に歩み、私を担うゆえに執り成しをしてくださった。私たちは神のとりなしのゆえに罪赦された者として今を生きる。私たちは喜びを持って、正しく「幸いな人」と呼んで頂く歩みを、このところから教えられて行きたい。私たちのために、今日も主イエスの「とりなし」がささげられている。
(神谷)